

令和7年度 第3回 運営方針会議 議事録

日 時：令和7年9月29日（月）10時30分～12時30分

場 所：本部棟5階大会議室 ※Web 会議併用

出席者：金出委員、久能委員、澤田委員、中西委員、平野委員、稲垣委員、岩井委員、
江上委員、小幡委員、湊総長

欠席者：堀場委員

【 報 告 】

1. 令和8年度概算要求について

文部科学省から財務省へ提出された令和8年度概算要求の概要について報告があり、意見交換を行った。

■ 委員からの主な意見（○：質問・意見 ●：説明・回答）

- 文部科学省の運営費交付金に関する方針が変わり、基盤的な研究教育活動に対する運営費交付金は増える一方、個々の事業や研究設備に関する支援が縮小するという問題もあると感じる。この点はどのように捉えているか。
- 物価高騰や人件費上昇が運営費交付金の算定に考慮されておらず、大学は日々の生活費に困窮している。文部科学省としてはその課題にてこ入れしないといけないが、予算がゼロサム考え方であるため個別の事業を減らさざるを得ない状況であると認識している。国全体として高等教育に充てる予算の絶対額を増やすことがない限り、現状から抜け出すことは難しいと考える。
- 運営費交付金の内容の見直しなども前提に、日本の教育システム全体として構造改革をしないと持たない状況に来ていると感じている。
- 教育システム全体という大きな問題にどう取り組むか、ぜひ日本の国立大学のリーダーの1人として、京都大学の学内でも議論していただくと良いのではないかと。

2. 令和6年度監事監査報告について

令和6年度監事監査の結果について報告があり、意見交換を行った。

■ 委員からの主な意見（○：質問・意見 ●：説明・回答）

- 監事監査で触れられている入試は非常に重要なトピックであり、大学院の場合は「試験による選抜」ではなく、「どういう人を引きつけるか」というリクルートの概念で考えるべき。

- 日本では学位プログラムの概念が希薄であると感じており、大学院の選抜でも、学部の延長のような形が残っている。国際卓越研究大学の制度においても重要な論点である。
- 報告書について、エビデンス・データドリブンの記述や数値が少ない印象がある。また、表現が丁寧すぎる印象も受けるため、監事は職務上「オーディター」という上の立場であり、その立場を踏まえてトーンを改善していただくとより良いのではないかと感じた。
- 報告書は評価する点、励ましている点、アドバイスしている点に分かれており、変革期にある大学の状況を理解しての監査報告であると感じた。
- 監査の結果、大学として遵守すべき点は達成されており、今後のことを考えると課題はあるという建て付けで報告書にコメントを付している。よりよい表現を検討していく。
- 監査結果は経営へのフィードバックと改善のサイクル（PDCA）に組み込むべきであり、良い指摘がされているため、指摘事項のフォローアップがあるとさらに良いと思う。
- 引き続きどのように変わっていくかチェックしていく。

3. 国際卓越研究大学について

国際卓越研究大学に関する審査の状況について報告があり、意見交換を行った。

■ 委員からの主な意見（○：質問・意見）

- デパートメント制は単なる組織改革ではなく、意識改革や業務改革も含めて全ての改革の起点となるため、デパートメント制が今後求められるだろう様々なシステムの統合やデータドリブンマネジメントにも資することを期待する。
- デパートメント制の理想と近い形で運営されてきた附置研究所等の例があるのであれば、それによって改革の実現可能性を伝える際に説得力が増すのではないかと感じた。
- iPS 細胞研究所や WPI 拠点のような好事例があることで今回提示した抜本的な研究組織改革に対する POC はできているので、それを全学レベルに scale（拡大）させたり、京都大学のエコシステムの中で duplicate（複製）することで新しい研究体制を拡大させていくという戦略もあるのではないかと感じた。
- 寄付受入総額やスタートアップ投資について意欲的な目標を掲げられているので、外部資金獲得戦略が着実に成功することを期待している。
- デパートメント制を中心とした研究システムと大学院・学部の教育システムを上手くマッチさせることが重要な点なのではないかと感じた。